
俺と幼馴染の波乱万丈な日

青海空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺と幼馴染の波乱万丈な日

【Nコード】

N3719P

【作者名】

青海空

【あらすじ】

俺には幼馴染がいる。

俺は、関係が壊れてしまうのが怖かった……

追記：余りにも急展開すぎたため、一度書き直しますm(____)m
書き直したら、「俺と幼馴染の波乱万丈な日(改)」という題名で
再び投稿しようと思います。何とぞよろしくお願いいたします(____)

（前書き）

どうも。青海空です。

二作目です。

やっと書き終わった……

正直、駄作だと思いますが、最後まで読んでいただけると嬉しいです（＾Ｏ＾）／

「コウくん。朝ですよー。雲一つない青空が眩しいくらいに輝いてますよー。実際は太陽が眩しいんだけどねー。アハハハ」

「……何をしているんだお前は」

寝起き一番に発した言葉は、「おはよう」という挨拶なんかではなく、ツツコミだった。

ああ。慣れとは恐ろしいものだな。

鍵を閉めておいたはずの部屋に不法侵入している女がいるというのに、驚かなくなるとは。

「あ、やっと起きたよー。ホラ！」

楓は手を俺に差し伸ばす。満面の笑顔で。

楓ー早川楓。

幼稚園からの付き合いで、まあ俗に言う腐れ縁ってやつだ。

俺は楓の手を取らずに再び楓に背を向けて寝入る。

「あー、こら！ もう、コウくん起きてよー」

楓は俺の肩を揺さぶるが、俺は狸寝入りに努めた。

「はあ。もうしょうがないなー」

と、背中に感じる楓との距離が近くなった。

何をするつもりだ？

「！」

突如、肩に何かが触れた。

柔らかい、が確かにある二つの感触……

「起きないと、コウくんの唇奪っちゃうぞ」

「なっ……！！」

耳元で囁かれた甘い言葉にぞくつと来た俺は慌てて布団を捲り上げて起き上がる。

「あはっ。ざーんねん」

「残念じゃねえよ！ いつも性質の悪い冗談はやめろって言って

んだろ！」

「あ、大丈夫！ 冗談じゃないから」

「尚、悪いわ！」

まったくこいつってヤツは……

こげ茶色のロングヘアーツインテールに纏め、整った顔立ちをしているというのに……性格がコレだもんな。

折角、可愛い幼馴染がいるという素晴らしいシチュエーションが出来ているというのに、嬉しくないのはどうしてだろう？

「ホーラ！ 早く着替えて学校行こ？」

机の上に置いてある時計を見ると、七時半を少し回った辺り。最終登校時間は八時十分であり、それ以降に学校に行くと遅刻扱いとなってしまう。

ここから俺らの通う高校までは、約三十分。

確かにそろそろ起きないとマズイか。

俺は楓に言われたから、ではなく単純に遅刻しないためにベッドから下りた。

……楓に言われたからじゃないからな。

「やーっと起きてくれたよー。って、ちょ、ちよっとタンマ！」

「何だよ？」

俺がパジャマの上を脱ぎかけた所で、楓から「待った」がかかる。

「着替えるなら私が出て行ってからにしてよ、バカ！」

楓はそれだけ言い残すと、部屋を出ていった。

その顔が赤くなっていたように見えたのは、気のせいだよな？

うん。気のせい気のせい……

俺は余計なことは考えずに、さっさと着替えてしまうことにした。

部屋を出ると、玄関に俯いた楓が立ち尽くしていた。

俺は玄関に用があるため、自然と楓の元に近寄る形になる。

「コ、コウくん」

「ん？」

ローファーを履いていると、横から声がかかった。

「今度から着替える時は言ってね。流石にコウくんといえど、着がえてる所はちよつと……」

楓は何故かそわそわしながら注意を促した。

何そわそわしてんだ楓のヤツ。

……まあいいか。

「あいよ」

俺は楓の要求を難なく承諾する。

「それじゃ気を取り直して……行こつか！」

楓は自分に言い聞かせるように言った後、ドアを開いた。

差し込んでくる光が、今日も暑そうだなということを予感させた。

八月十日。

世間一般でいう夏休みだ。そんな夏休みであるのにも関わらず、俺らが学校に行く理由など一つしかない。

……地獄の赤点補修だ。

ちなみに楓はこんな性格の癖に頭脳明晰であり、赤点なんてもつてのほかである。

それなのに、何故かこいつは俺の補修に付き合っているのだ。物好きなヤツっているんだな、ホントに。

「おーふたりさーん！」

楓と並んで歩道を歩いていると、背後から声がかかった。

「あ、真奈実まなみ！　それに伸二しんじくんも！　おはよー」

「よーす」

俺と楓は対照的なトーンで二人に声をかける。

「相変わらず仲が良いわねー」

そんな俺らを真奈実はニヤニヤしながら見ている。

「まあねー」

「いや、否定しろし」

「え？　だってホントのことだよ？」

「……すまん。もういい。あきらめた」

楓の性格だから仕方ない、と俺は小さく溜息をつく。

「流石楓ね。期待を裏切らない子だわ」

真奈実は楓を背中からぎゅーと抱きしめた。

「ちょ、ちよつと真奈実ー」

「いいじゃんいいじゃん。ふわー。楓の匂いがするー」

お二人さんは女の世界というものに入ってしまったようだ。

「朝から暑苦しいよな、真奈実のやつ」

伸二が妹である真奈実の行動を見て、呆れたようにつぶやく。

「何か言ったか馬鹿兄さん」

「何もいってねえよ」

今更だが、伸二と真奈実は同い年の異母兄妹である。

詳しいことはわからないが、一年前辺りから同じ家で過ごすことになったらしい。

「嘘。絶対何か私の悪口言ってた」

「だから言ってねえと何回言ったら気が……」

「まあまあまああ」

既に日常茶飯事となりつつある兄妹喧嘩に楓が割って入る。

二人の喧嘩は楓の仲裁により、楓に甘い伸二が先に折れて真奈実に謝るという形式で、いつも通り幕を閉じた。

「やっとおワター！」

伸二が空に向かって伸びをする。

「ホント長かったー！」

「もう赤点とかいう制度なんか消えちゃえばいいのに」

「同感」

一週間にも渡る長い補修がやっと終了し、ようやく俺らは羽根を伸

ばすことに成功した。

帰り道も不思議と足取りは軽い。みんなもそうなのか、今日は伸二のいつもなら白けるジョークでさえも笑ってしまった。

そうして歩いている内に伸二や真奈実と別れる交差点に辿り着いた。

「あ、そういえば！」

真奈実が別れる直前、何かを思い出した。

「今日、仙龍川で花火大会があるらしいんだけど、みんなで見に行こうよ」

「花火ー！？」

楓が一際大きい声で真奈実に聞き返す。その目は、小さい子供が欲しいものを買ってもらった時のものに似ていた。

そういえば楓は花火が昔から好きだったもんな。

仙龍川とは、ここの交差点から徒歩五分くらいで到着する所にある、小さな川だ。

「そうよ。今日の夜の七時半からなんだけど、どうかな？」

「コウくん行こうよ！」

楓が俺の手をブンブン振り回す。

まあ特にやらなきゃいけないことがあるわけでもないしな……

「いいんじゃないか？」

「オツケー。ならここの交差点に七時集合ってことで！」

真奈実の提案に頷き、俺たちは一度解散した。

空を見上げれば、先程までの青空が嘘だったかのように、黒に覆われていた。

その黒に白や赤や青の星が満遍なく散らばっている。今日の月は綺麗な上弦だった。

「コウ」

「おう。伸二か。二人は？」

「先に待ち合わせ場所言ってるって追い出された」

伸二は肩をすくめて見せた。

六時くらいに真奈実が楓を呼び出していたため、今楓は真奈実及び伸二の家にいる。

しかし何やってんだろ？　もうすぐ七時になるっていうのに

……

時計の長針が十二を指した所で、俺らは二人を呼びに行こうと家に行こうとした。

「お待たせー！」

「やっと来たか」

俺は軽く毒づき、後ろを振り返る。

「……」「わーお」

俺は二人を見て某然とした。伸二はワザとらしく感嘆を上げた。

「どうよ？」

真奈実が誇らしげに胸を張る。

「ええーと、その子誰？」

「もう！　何言ってるのよコウ。楓に決まってるんじゃない」

そうだよな。そうに決まってるよな。

だが……

浴衣姿の楓は、まるで別人のようだった。

ツインテールだった長髪は後頭部で団子のように纏められ、少し化粧もしているのか何だか雰囲気ガラツと変わっていた。

金魚の絵柄の浴衣に身を纏った楓は……

「どうかな？　私の浴衣姿……」

それはもう悔しいくらいに似合っていた。

「コウ。何か言っただけなさいよ」

俺は真奈実に促されてようやく俺が黙りこくっていたことに気付く。

「いいんじゃないか？　ほら、馬子にも衣装って言っしな」

「ま、馬子にも衣装って……」

言った瞬間、俺を後悔が襲った。楓は今までにないくらい衝撃を受

けた顔をした。

何で思ってもないこと言ってた俺は。

「ま、まあホントは、早川さん似合ってるってコウも言いたかったんだよ」

空気が悪くなったのを感じてか、伸二がフォローを入れる。

「あ、別に大丈夫だよ伸二くん。いつものことだから」

楓は取り繕った笑みで「ほら行こ！」と仙龍川の方を指差して先に歩いていった。

俺の手は掴まれることはなかった……

「コウ。あんたちよつと来なさい」

仙龍川に着いて暇を持て余していた俺は、真奈実と呼ばれ楓と伸二の二人から少し離れた場所に移動した。

「何だよ？」

「あんたねえー。今までは楓がそれでも良さそうだったから何も言わなかったけどさ。楓の気持ち分かってるんでしょ？ 何であんた、楓にあんな態度とるのよ？」

語調はまだ柔らかいが、真奈実は本気で怒っているようだった。どうしてあんな態度を取るのか、か。

そんなの……自分が一番よく分かってる。

「真奈実には関係ない」

俺の言葉にピクツと真奈実の眉毛が釣り上がった。

「確かに私は、あんたたちとは知り合ってからまだ四ヶ月と経っていないわよ。でもね、そんな短い期間だったけど、楓とは親友になれたのよ。だから楓の恋を応援してあげたいと思う。それと同時に、その親友の幼馴染のコウの幸せも願ってる……」

真奈実は落ち着いた声で話している。

「ねえコウ。あなたは楓が嫌いなのか？ 嫌いなら嫌いで構わない。そりゃ楓が可哀想だけど……でもはつきり嫌いなら嫌いという理由がわかれば、きつと楓は納得すると思う。だけど、コウは特に楓をスル

「したりとか、生返事しか返さないとかはしてたけど、決して邪険に扱ったりとか本当に楓を傷付けるようなことは言わなかった」

真奈実の本心を見透かしたような言い草に、俺はドキツとする。

「ねえ、コウ。あんたは楓が嫌いじゃないわよね？」

「……当たり前だ」

楓のことが嫌い？

そんなことあるわけないだろ。だって俺は……

「じゃあどうして、今日もあんな態度とったの？」

「それは……」

俺は真奈実に話すべきか迷った。だが……真奈実は楓に告げ口などしないだろう。

俺は真奈実を信頼して、本心を打ち明けた。

七時半になっても、花火は打ち上げられることがなかった。

先程放送で、三十分遅れての打ち上げとなるらしい。理由はよく聞こえなかったが。

「……………」

俺と楓の二人は、並んで花火が打ち上げられるのをじっと待っていた。

真奈実が気を利かせてくれたのはいいが……いくらなんでもいきなりすぎるだろ。

「……コウくん」

「え？」

俺がうずうずしていると楓が俺の名前を呼んだ。

「あ、えーと、どうした？」

「……………」

楓は非常に言いつらそうな顔をしている。まるで言つのを躊躇っているかのよう。

「楓？」

「……さつきね」

楓がようやく口を開く。と同時に、伸二の方をちらっと見る。嫌な予感がした。

「伸二くんに告白された」

「！」

衝撃とともに何かが俺の胸を抉り取った感じがした。

抉り取られて空っぽになったところから、俺は崩れてしまいそうになる。

「そ、そうなのか……」

おい。ちよつと待て俺。何も言うんじゃないやねえ。

「伸二か。伸二ならいいんじゃないか？　優しいし周りに気を配れるし」

ふざけるな。そんなこと言いたいんじゃないやねえんだよ。

「いつそさ……」

やめろ！　そのあとに続く言葉だけは絶対に言うな！！

「付き合ってみたらどうだ？」

「……え？」

楓は信じられないというような顔をした。

馬鹿野郎！　俺の馬鹿野郎！

付き合ってみたらなんて！　そんなの……絶対に駄目だ！

「やっぱりコウくんは……私のことなんか、何とも思っていないんだね……」

その泣きそうな楓の顔に、俺まで吊られて泣きそうになる。

やめろ。そんな顔しないでくれ……

「楓！」

途端に楓が走り出した。俺も遅れて楓を追いかける。

本当に最低だ俺……真奈実とも約束したのに……！　楓を幸せにするって！

俺は人込みを避け、楓の姿を見失わぬように目で追いかけた。

「くそ……」

追いかけてから数分後。

俺は楓を見失ってしまっていた。

どこかの婆さんとぶつかってしまい、転ばせてしまったのだ。起こしてあげて、顔を上げた時にはもう……

ギリツと齒をかみしめる。

畜生……俺ってホントに駄目な奴だ。

好きな女の子さえも見失ってしまうなんて……

「ねえ、君一人？」

ふと、我に返ると少し離れたところでナンパをしている連中の声が聞こえてきた。

「いえ、友達と来てるんで……」

ナンパされてる女の子の声は……まさか。

「いいじゃん、ちょっとくらい付きあつてよ」

「嫌、ちよつと……！」

「おい」

俺は楓の手をつかむ男の手をつかんだ。

「何だお前。その子の彼氏か？」

金髪にピアスを付けた典型的なチャライ男が苛立った声を俺に向けた。

「ああ、そつだよ」

「え？」

楓を俺の背中に連れて行き、俺は男と対峙した。

相手は他に二人の計三人。いざ、喧嘩となったら楓だけでも逃がすしかないな。

「ほう。いい度胸してんな、彼氏さんよー」

にやにや笑い出したリーダー格の男が俺との距離を詰め……

バキッ！

「くっ……！」

頬を殴られて俺は屋台の机に頭を打ち付ける。

「コウくん！」

楓が既にグロッキーとなった俺の元に近寄る。

「大丈夫コウくん？」

「あ、ああ何か」

楓に笑って見せるが、上手く笑えてない気がする。

「君たち、何してんだ！」

「やべ、ポリだ。逃げるぞ」

男三人組は警察の登場により姿を眩ました。

「大丈夫かね君？」

「あ、大丈夫です。お世話がせしました。……行こう楓」

「あ、うん」

俺は楓の手を掴み元来た道を辿った。

「コウくん。もういいよ」

楓が少し歩いた後に俺の手から逃れようとする。

が、俺は楓の手を離さなかった。

「何で……？ 私のことなんかどうでもいいんでしょ？ ……」

私今までね、心のどこかでコウくんも私が好きなんだって自惚れていたの。でも今日わかったから。……もう朝勝手にコウくんの部屋入ったりしないから……スキンシップも取らないようにする。だから

……」

「違う！！」

「！？」

「違うんだよ楓……」

俺は楓の瞳から零れる涙を親指で拭った。

「俺、今まで逃げてただけなんだ。楓と幼馴染の関係が壊れてしまつたのを感じない内に恐れてたんだ。だからワザと冴えない返事ばかりして……幼馴染という関係をキープしていたんだ。だから、さ

つき楓に言ったことだって、ホントは……ホントは、あんなこと言
いたかったんじゃないかって……」

くそ。涙のせいで言葉が詰まって出てこない。

楓に伝えないといけないのに……！

俺の内は楓に対する申し訳なさで溢れかえっていた。

早く、次の言葉を。

「コウくん」

突然、楓が俺の背中に手を回して、優しく、俺を抱きしめた。

「かえ……で……」

「わかった。コウくんの気持ち、わかったから。……だから、もう
何も言わなくていいよ」

「楓……！」

今まで俺の冷めた態度を見ても、いつも笑っていてくれたというの
に……

今まで、散々辛い思いに耐えて来たというのに……

そんな思いをさせていたのは俺なのに……！

楓は今もそんなだった俺に優しくしてくれる。

「ごめん……ごめん……」

俺はひたすら楓に謝り続ける。そして――

「なあ楓……今まで散々ダメな奴で、楓を苦しめてたけどさ……俺
はお前が好きなんだ。だから……ずっと、俺のそばにいてくれない
か？」

やっと……やっと、言えた。

弱虫な俺がずっと伝えられなかったこの気持ちを、やっと届けられ
たんだ。

「うん。ずっと、コウくんのそばにいるよ」

「……ありがとう。楓……！」

俺たちは再び力強く、お互いの存在を確かめ合うように、抱きしめ
あった。

ヒューーン！　　パン！

「あ……」

二人の声が重なった。俺らは可笑しくてくすくす笑い合う。俺は楓の手を強く握りしめた。楓もそれに応えるように握り返してくる。

例えこれから俺らを待ち受ける日々が、波乱万丈だったとしても、俺はもう二度と君の手を離したりはしない。

誓った空を見上げれば、そこには色とりどりの火の花が俺らを祝福するかのようには咲き誇っていた。

（後書き）

最後まで読んでくださった方々ありがとうございます（TーT）

ちなみに伸二と真奈実は遠くから二人がだきしめあっていたところを見ていました。

伸二は自分の恋が実らなかったですが、二人が幸せになってくれるならと、素直に二人を祝福した……
という感じです。

感想、評価など頂けたら泣いて喜びます！

では。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3719p/>

俺と幼馴染の波乱万丈な日

2010年12月14日19時59分発行